（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：　農学研究科 修士1年

氏 名：　渕田　絢子

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先（国・地域） 滞在地	ミクロネシア連邦 および グアム（米国）
研修期間	2017年9月3日　～　2017年9月10日

〔研修を通じて得た成果〕

今回初めて海外を訪れ、ミクロネシア連邦チューク州の島の人々と交流をすることで、彼らの「生きる力」を身をもって感じた。食べ物や教育をはじめとする島の文化をすぐに受け入れることは容易ではなかったが、電気・ガス・水道がないからこそ人々の距離が近く、友好的な人格が形成されているのだと感じた。それは贅沢すぎる生活をしている日本人にはないもので、ある種の憧れを感じた。島の教育制度としては、鹿児島県周辺の三島村硫黄島の学校と同様に複式学級が取り入れられていた。「算数」の勉強をしているところを実際に見学したが、日本ほど教材は豊富ではないが内容は似たようなものであった。また、話を聞くだけではなく、大学で学んでいる内容を島の人に話し、島の果樹として存在する「パンの実」や「ココナッツ」の話を聞くなどして交流を深めることができた。日本から持って行った嗜好品をともに楽しみ、短い間であったがとても視野の広がった数日間であった。

グアムを訪れた際は、グアム大学のユキコ・スミス・イノウエ教授に特別講義として時間を作っていただき、貴重な話を聞くことができた。グアムにおける医療や教育と日本の違いについての話が印象的で、今後も国際的な知識として覚えておきたい話ばかりであった。ほかにも時事問題として北朝鮮のミサイルに関する現地の人の意見を聞くことができ、非常に有意義な時間を過ごせた。また、太平洋戦争での悲惨な過去を知ることができる資料館を訪れた。大きな地図や模型校とあわせて日本語の文章で詳細な説明が書いてあり、日本が関係している過去の戦争について日本じゃない土地で学ぶことができたことは非常に貴重な体験だった。

〔研修後の抱負〕

今回の研修で、言葉がなかなか通じない中で必死にコミュニケーションをとり、現地の生活習慣に適応していくなかで自分を見直すきっかけになった。今後も国際的な経験をし、自分の視野を広げていきたいと思った。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 保健学研究科M1

氏 名: 大栄　恵

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先（国・地域） 滞在地	ウェノ島・ピス島（ミクロネシア連邦チューク州）、グアム島（アメリカ合衆国準州）
研修期間	2017年9月3日～2017年9月10日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修ではじめて日本以外の島嶼部を訪問した。研修先のウェノ・ピス島、グアム島は南太平洋に位置し、日本に約30年統治された歴史をもつ。鹿児島の離島と異なる点は、自然環境の違いはもちろんであるが、欧米諸国や日本の統治を受けながら、今もなお自然とともに生活する自給自足の生活が現存していることであった。鹿児島の島嶼部ではインターネット環境の整備は島によって差異はあるが、携帯電話をもつ世代の割合は増えており、個人が情報を得やすい環境にある。島に商店がない小規模島嶼においてもネットや携帯を使用して本土からネットショッピングで食材を購入している家庭が多い。便利である反面、直接人を介さず画面上で容易に物を購入できるシステムや情報が氾濫したインターネット情報は人と人の関係性を希薄化させるリスクを伴う。島の強みといわれた結の助け合いの精神も物の豊かさにより、薄れつつある島の現状も危惧されている。その離島の現状と対極にあるミクロネシアの島嶼部ピス島では、大家族を一体とした家族間での助け合いがあり、ウエノ島やグアム島に移住する一族間で高等教育を受ける子ども達を支援していた。収入を得る仕事はほぼ島内にはなく、自然と人が生きるために必要な能力を生活の中で磨き、一人ではできないことを協働することで生活していかなければならない現状があるが、そのプロセスが人のつながりを深めていることを今回日本と海外の島嶼部で相対化することにより学びが深まった。また、ミクロネシアは米国の支援を受けており、英語を使用する頻度も高いことから、現地語と英語を話す方が多かった。日本の英語能力の遅れは明確であり、英語で話す機会を増やすということよりも英語が当たり前の環境下に身をおくことの必要性を感じた。今回の研修での大きな学びは、国際島嶼部の現地で生活するファミリーと生活をともにすることで、彼らの日常をともに体感し、知識だけではない現地の視点を直接自らの経験とすること得られた知見と繋がりである。この研修でつながった関係性を大切にグローバルな視野を意識して、今後に活かしていきたいと思う。

〔研修後の抱負〕

ウェノ島・ピス島での生活のあり方は、物質的な文明に囲まれた日本では気づきづらい基礎的な生活基盤について実感を得る契機となった。医療がなぜ私たちの生活に必要であるのかという根本的なことを他の医療職同士でも見つめ考える必要があると、この研修後考えるようになった。国際的な視点、異なる専門分野の視点、生活者の視点を積極的に取り入れながら、私自身も専門分野から地域社会に貢献できるよう努めていきたい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：農学研究科・修士2年

氏 名：松本健資

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先（国・地域） 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成29年9月3日　～　平成29年9月10日

〔研修を通じて得た成果〕

ウェノ島はチュークの島々に住む人が食料などの物資を時折、小型のボートに乗って買いに来る場所で、海外から輸入された商品を含め生活に必要なものはほとんどウェノ島で入手できる。周辺の島々で生活する人たちにとって小型ボートは欠かせないものである。島は観光地化されており主にダイビングを楽しみに来る人が多い。鹿児島の離島と比較するとダイビングやフィッシングなど綺麗な海、自然を利用した観光地という点で重なる。生活物資の入手において、チュークの島々の人々は各々の代表が定期的に中心地に出向くが鹿児島では交通、運送が発達しているので自ら足を運ばずともそれぞれの島に物資を届け入手することができる点が異なる。島の医療は鹿児島の場合、離島医師がいるがチュークの離島には常に島にいる医師はおらず定期的に回っているもしくは中心地に出向くと聞いた。同じ離島で観光業を中心に栄えているとはいえ日本とミクロネシアでは生活の安心という意味では全く異なっていた。鹿児島の離島に行ったときに島民の生活に欠かせないものを感じることはないがミクロネシアの人々（成人）にとって嗜好品は生活に欠かせないものになっていると感じた。男性も女性も成人を過ぎたものはほとんどの人がビンロウと呼ばれるアジア・太平洋、東アジアなどで栽培、利用されているものを嗜んでいた。日本はモノがあふれておりその中から自分が好むものを選んで嗜むことができるがミクロネシアでは限られた環境、ものしかないので自然とみんなが同じものを好み共有しているのだと感じた。

〔研修後の抱負〕

今まで離島に住んだことがなく「離島」とひとくくりにしてきたが、鹿児島の離島を数か所回り、今回の研修で海外の離島をみたことで離島それぞれに独自の文化や人柄がみられた。私は来年度から離島がある県に勤めることになるがそれぞれの良さを知り、活かしていけるよう努めたいと感じた。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 農学研究科・修士2年

氏 名: 山邉菜穂子

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先（国・地域） 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成29年9月3日　～　平成29年9月10日

〔研修を通じて得た成果〕

本講義は「生存基盤の再確認」および「地域活性化に資するグローカル人材育成」を目的としていた。その中でも特に今回は前者について深く考える講義となった。私たちはウェノ島・ピス島（ミクロネシア連邦チューク州）、グアム島（アメリカ合衆国準州）の3つの島を訪れ、特にローカルな島であるピス島には2泊3日した。国際空港があるウェノ島からモーターボートで一時間ほど進むとピス島に到着する。ピス島は人口250人ほどで、歩いて30分程度で島を一周することができるとても小さな島だった。電気・ガス・水道はなく、お風呂は野外にある共同の井戸で体を洗い水浴びをする程度だ。私は今年の2月までインドネシアに留学しており、その時は水のシャワーを浴びて毎日過ごしていたが、それに慣れていても今回の野外での水浴びには正直驚いた。ピクニックという名目で無人島に連れて行ってもらった時、何もないところから魚や貝、カニを捕ってきて手で捌き、刺身や焼き魚にし、大きな葉を皿代わりにして並べ、ふるまってくれた。きれいな皿に芸出的に並べられた日本の刺身ももちろん美味しいが、数分前までまで生きていた魚を手づかみでかみちぎって食べるピス風の刺身がとてもおいしく感じられた。スーパーへ行けばほしいものは大体買える日本とは違い、食べられるものは限られているしインフラの面でも不便なことはたくさんあるが、周りをたくさんのサンゴと真っ白な砂浜に囲まれ、すぐ近くにはイルカもウミガメもたくさんいる小さな島での生活は、「生きる」を何度も実感させてくれた。食べるものは自分たちで調達しその他の生活の基盤はすべて島にあるピス島での成果は、生きることはどういうことかを深く感じ、考えさせられるものであった。

また、この研修ではミクロネシアの歴史をはじめ今まで知らなかった多くのことを学ぶことができた。グアムについては最近日本で流行っているリゾートという認識しかもっていなかったが、歴史を学んでみると今でも日本から解放され7月２１日は解放記念日で祝われているということだった。ただ観光として行くだけでは学ぶことはできないたくさんのことを知り、考える機会を持てたと思う。

〔研修後の抱負〕

この研修で学んだ「生きる」という基本的なことを忘れないようにしたいと思った。日本での恵まれすぎた生活の中で、生きるということの基盤について分からなくなる時があるが、そんな時にこの研修を思い出したいと思う。また、今回自分が世界の歴史について無知なのだということ強く実感した。今後、よりグローバルに物事をとらえていくためにも、日本だけでなく世界中の歴史や出来事に目を向けていくことの重要性を改めて感じた。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：　農学研究科 修士2年

氏 名:　古澤　典子

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先（国・地域） 滞在地	ミクロネシア連邦 および グアム（米国）
研修期間	2017年9月3日　～　2017年9月10日

〔研修を通じて得た成果〕

私は今回の講義が初めての海外だった。見るものすべてが刺激的で、通常の観光旅行では経験できないような体験ができたと感じている。これまでに島嶼学概論ⅠおよびⅡを受講し、鹿児島県の硫黄島と中之島を訪れた経験をふまえ今回訪問した島のことや全体を通して学んだことについて報告する。

まず、ミクロネシア連邦チューク州のピス島においては、インフラはほとんど整っておらず、電気は発動機で供給しており、島の家族の家に2泊させてもらった。その中で島内におけるゴミの問題を考えさせられた。小さな子に飴をあげた際、包装紙を躊躇なく地面に捨てたのを見て、驚いた。島内にはプラスチックや空き缶などのゴミが散乱しており、ゴミの分別意識が低いと感じた。美しい自然を守るためにも、ゴミ分別の意識を教育に取り入れることが必要なのではないかと感じた。ウェノ島においては、未舗装の道路が多かった。自動車で島内を走った際、スピードが出せないことはもちろん、水たまりができるため、衛生面でも問題だと思った。グアムにおいて滞在した所はインフラも整い、日本と変わらない生活だった。しかし、グアム大学で教授をしているユキコ・イノウエ先生にお話を聞いた際、多くを輸入に頼っているため、物価が高いとおっしゃっていた。これはグアムに限らず、日本の離島が直面している問題でもある。また、日本の離島と共通することとして、教育の問題が挙げられる。ピス島の人はグアムに親族が住んでおり、子どもをグアムの学校に通わせていた。高校や大学がないことだけでなく、無償であることや質の問題があるのではないかと感じた。

以上のように、今回の研修を通してミクロネシア連邦の問題だけでなく、日本の離島と共通する問題にも気付くことができた。しかし改めて感じたのは、1つとして同じ島はないということだ。訪れた3つのどの島にも、それぞれに美しい自然や文化があり、一方で問題点も見られた。そして、日本で暮らしている中では気付かなかったが、様々な環境下で生活している人がいることを実感した。それと同時に、彼らのたくましさを学び、大いに刺激をもらった研修であった。

〔研修後の抱負〕

今回の講義での反省点は、自分の言語の壁よりも気持ちの壁が大きかったことだ。英語に自信がないため、始めは現地の人になかなか話しかけられなかった。食事や遊びをともにするなど、同じ時間を共有することで徐々に打ち解けることはできたが、短い滞在であったので、始めからもっと交流をすればよかったと後悔した。自分自身の語学力を高めることは勿論だが、積極的に打ち解けようとする姿勢が最も大切だと学んだ。次回、海外に行ったり、他国の人と接する機会があれば、あまり構えずに話したいと思う。そして、今後も日本や世界の島嶼について考えていきたい。